

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

# 戦史館だより

2025年2月05日発行  
 戦史館事務局〒029-4427  
 岩手県奥州市衣川陣場下  
 41番地 齧オフィス花岡  
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩渕 宣輝 事務局長 花岡千賀子 ☎0197-52-3000

2025年、今年は戦後80年の節目の年、昭和、平成、令和へと年号が変わるたび、はるか昔のように聞こえますが、昭和で数えると昭和100年。また太平洋戦史館として活動を始めたのが1995年なので、活動30周年の大きな節目。おかげさまで30年も続けました。

## 2024年秋、はがき投票で第23回通常総会が成立し、議案はすべて承認されました。

都内で顔をあわせて総会を開催できたのは2019年までで、戦後75年節目の年でした。2020年以降はコロナ禍で、遠出が難しくなったこともあり、正会員の9割以上が参加するはがき総会が、すっかり定着しました。はがきが委任状になっていた頃は「議長に一任」という一言で済ませる会員も多かったのですが、はがきそのもので総会に出席することになってからは、会員の日々の様子やメッセージが綴られているので、一枚一枚を拝見し、一語一語その文字に励まされながら活動を続けることができました。

白寿(99歳)の会員の一字一字、101歳会員からの一言一言に刺激され、今年84歳になる若輩の岩渕は「おそれいりました…見習わせていただきます…」と目を見張るばかりです。庄司憲夫さんからいただいたメッセージを紹介します。「101歳の胸に繰返しせまるもの…小さくも、その一歩から、平和の礎石が築かれていくものと。尊き人々、はやく故国に迎え抱きてやりたし。後継者が絶ゆることなく、この会の志、永く伝えられんことを。」

会員の皆さんの返信はがきから、戦史館だより1年分の共感や憤り、様々な反応が伝わってきます。記事は毎号、明るい内容よりも真逆のものが多く、読むと気持ちが重くなる内容でした。昨年はパプアへの“現地調査・遺骨帰還”が再開されて良かったという明るい記事よりも、これまで戦史館が現地で進めてきた活動が否定される場面に直面し、くやしい思いを吐き出した記事だったり、ビアクに仮安置していた遺骸の盗難事件というショッキングな出来事を伝えたり、停滞どころか後退している外交交渉に憤ったり、戦史館がカヤの外に置かれたような不満、そんな記事が多かった…それでも熟読いただき意見感想をいただきありがとうございます。

そして前年度の戦史館会計の窮乏を訴えたところ、多数の会員と支援者の方々から力強い応援の寄付をいただきました。どんなに理想を掲げても「背に腹は代えられない」し、「掛け声だけでは続かない」のは事実で、そこで活動はストップしますが、戦史館のこの窮状に、年に1回の会員継続手続きと一緒に「赤字解消の一助に…」と皆様のご支援。ほっと一息、今年度も活動を続けていけます。まずこれまでの活動ふりかえりから…

## 戦史館活動30年をふりかえって

1995年、戦後50年の節目となる年に太平洋戦史館がスタート。2009年までの活動は主にパプア州へ。会員が自費でゆかりの戦没地巡礼に参加し、日本兵の遺骸がたおれたままその地に放置されている現場を発見したことから『未帰還兵の捜索』が始まりました。次の頁

前の頁より

発見の度に情報を詳細に厚労省に報告し、遺骨帰還を要請し続け、漸く1999年にインドネシアからの遺骨帰還再開にこぎつけました。「この方面の遺骨収集はほぼ終了した」と厚生省が宣言してから25年ぶりの遺骨帰還再開です。

2010年から2015年までは、戦史館が厚労省の未送還遺骨情報収集事業のインドネシア共和国パプア州を担当することができて遺骨帰還へ大きく前進しました。現地情報をもとに戦史館の会員チームがパプア州へ。現地で日本兵の可能性が高い遺骸を仮安置し、遺留品を保管し、毎回の遺骨情報記録を厚労省に提出することで、政府派遣遺骨帰還に繋げることができました。法医学者の鑑定を受けて茶毘にふし、日本に帰還できた柱数は1568柱。

2015年の政府派遣を最後に、海外調査活動が8年間ストップしました。その間に遺骨帰還事業の進め方も大きく変化しました。戦没者遺骨収集推進法が成立し、厚労省の下請け組織である日本戦没者遺骨収集推進協会が設立され、戦史館は推進協会を構成する団体の1つとなりました。戦史館だよりではこの現象を「3階から目撃」「屋上屋を重ねる」と表現したとおり…なかなかムズカシイ。戦史館会員が自費で未帰還兵を捜索した時代や、厚労省の事業で現地の人と交流しながら自由活発に情報収集ができた時代は、今と全く別の世界です。現在、戦史館は推進協会主催の「現地調査・遺骨帰還派遣」に参加希望者を推薦していますが、派遣団に参加した会員の中にも違和感はあるかもしれません。

DNA鑑定も必須になりました。派遣団に専門家が同行し「日本兵ではない」と鑑定された遺骸の中には、日本軍として戦闘に加わった台湾出身者やジャワ人の可能性はないのか？と疑問に思うこともあるかもしれません。

昨年5月の派遣で「日本兵の可能性あり」と判定され、ジャカルタのBRINという施設でDNA鑑定されるはずだった遺骸9体は、今も大使館に仮安置されたまま。推進協会によると、どこかの民間団体で鑑定できるかどうか検討中とのこと。先が見えない遺骨帰還事業に外交交渉は何をしている？ 我々に残された時間は僅かなのに…と焦ります。

## できることは小さいことかもしれないが それでも とにかく続けましょう

日本が抱える超深刻な問題とは別に、私たち戦史館にできる超ミニサイズで明るく嬉しい出来事に目を向けてみましょう。昨年「現地調査・遺骨帰還派遣」では、派遣を希望する会員に、戦史館から推薦できる人数枠として、各回3名分を確保できています。長年の篤い思い…父の戦没地へ慰霊に行きたい…と切望し続けていた80代の女性お二人の希望がようやく叶ってほっとしました。昨年2月ヤカチへ辿り着けた絹川さんはヤカチ調査の先駆けでした。8月ジャヤプラ方面派遣に参加した小山さん。小山さんのお父さんは6030部隊に所属し、ジャヤプラからサルミ敗走ルートの途中で亡くなっています。今回はお父さんの足跡をたどる旅でした。写真は畠山さんが撮影した動画の一場面。場所はゲニムのマーティン・ブアムさんの自宅前。ジャヤプラからの敗走路途中の



ゲニムでは、6030部隊の認識票が度々発見されています。写真左は認識票を見ながら話を聴く小山さん、認識票の説明をする厚労省の宮下さん。右端マーティン・ブアタイムさん。

戦史館では、再び現地へ行きたいと願っても難しい会員には「身内でどなたか若い方の参加を…」と呼びかけています。8月の派遣団にお孫さんの佐々さんを送り出した阪本さんからは「全く初めての経験で、戦争は想像以上の困難と苦しみであることを、現地で体感できたようで良かったです」。また「私と同じひ孫の世代が遺骨帰還事業に参加していることに、感銘を受けました」という声も寄せられました。8月の派遣では一番期待されていたサルミ方面の調査が、インドネシア側の事情や推進協会の都合で削除されてしまいましたが、今年の調査を期待したいところです。

インドネシアでの最終日、ジャカルタの日本大使館で報告会が行われました。団長から正木大使へ概要が報告され、続いて団員に向けて、大使から意見を求められる場面がありました。畠山さんが発言し「20年前に岩淵会長の導きで、祖父の戦没地のサルミへ、父を連れて行くことができました。現地の長老と父がにこやかに握手できて嬉しかった…。今も国と国、“正義と正義”が妥協なく衝突する戦争が続いています。戦争は結果として、現地の人を巻き込んだ殺しあいには過ぎなかったことを反省して、国は同じ不幸を二度と引き起こさないようお願いします」と気持ちを伝え、締めくくりました。

### 今後の現地調査・遺骨帰還事業の予定は？

当初、昨年11月に予定されていたビアク方面派遣が延期されていましたが、3月4日から19日までの予定で、戦史館からは3名参加が内定しています。内定後もまだまだインドネシア側と交渉が続いている様子ですが、派遣の報告は5月に発行予定の戦史館だよりに掲載します。2月は翌年度の派遣計画について、推進協会ではヒアリング会議があるので、戦史館からは、サルミ方面派遣など、重要で緊急性が高い派遣を要請する予定です。

戦後80年 戦跡取材活動30年記念 戦跡カメラマンの安島さんの記念写真集が7月に刊行されます。詳細は⇒ TEL 090-1030-6827 mail photo@yasujima-takayoshi.com

### 戦後80年企画 戦跡取材活動30年記念作品

2025年は戦後80年の節目の年です。戦争体験者はもとより、その遺族さえも亡くなったり高齢となっています。

戦後生まれの私が、戦跡を訪ね歩き写真に記録し続けて30年が経ちました。

戦跡は「もの言わぬ証言者」とも言われています。日本各地には要塞・地下壕・トーチカ・飛行場跡など軍事施設や武器・兵器を造った軍需工場などさまざまな戦跡が、また海外の戦場跡には戦闘機や大砲の残骸、砲台、防御陣地跡などの戦跡が残っています。

国内は47都道府県を取材、海外取材地はアメリカ、インドネシア、フィリピン、パプアニューギニア、パラオ・ミクロネシア・ソロモン・チューク諸島、中国、韓国、台湾、シンガポールなど17地域におよびます。

今回、戦跡写真を厳選して1冊の写真集にまとめて皆さんに紹介します。これまで30～40ページの冊子版写真集を出版してきましたが、今回は120ページと集大成写真集にふさわしいボリュームと充実した内容構成になっています。

国内外の戦跡がかもし出す「声なき声」に耳を傾けながら戦跡写真を見ていただき「先の大戦」とは何だったのかを考えていただければ幸いです。

安島 太佳由 写真集  
戦跡が語る「先の大戦」  
A4版 120ページ 定価:3000円(税込)  
安島写真事務所刊

